

教職科目「教育原理」における事例教材を用いた授業に関する開発的研究

Course Design of “Principles and Thoughts of Education” with the Idea of Case Method Education

次世代教育学部教育経営学科

長谷 浩也

HASE, Hironari

Department of Educational Administration
Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部教育経営学科

浅田栄里子

ASADA, Eriko

Department of Educational Administration
Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部教育経営学科

山口 裕毅

YAMAGUCHI, Yuki

Department of Educational Administration
Faculty of Education for Future Generations

Abstract : The recent societal situation in Japan requires its teachers' colleges to train students to be work-ready graduates. In response to these expectations, we established a project to elaborate on the teaching philosophy intended to improve the course design of 'Principles and Thoughts of Education'. In teacher education curricula, courses emphasise teaching ideals, history, and ideas on education. In some cases, the contents tend to be abstract and distant from the students' daily experiences. Thus, this project first developed teaching materials with a focus on case method education. The teaching materials are based on situations in schools, which has rarely been done, although it is important for students to understand. Second, this project clarified students' impressions of the classes they taught using the teaching materials. We expected the students to develop their personal ideas about teaching as well as teaching skills. The results revealed that the second goal was achieved. We concluded that, to improve course design, it is indispensable to ameliorate questions for the teaching materials. When the measure takes and the course is taught, students might foster their teaching skills and attain a new perspective on the education required for the teaching profession.

Keywords : Pre-service Teacher Education, Principles of Education, Case Method Education, Reflection

はじめに

2015（平成27）年12月、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について－学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて－」が出された〔中央教育審議会2015〕。この答申の中で教員養成に関しても指針が示された。それは、望ましい教員養成の事項を国が提示し、大学が教職課程を編成する際の指針（教職課程コアカリキュラム）とする、というものである。具体的な養成の方法は各大学の自主性、自律性に委ねるという留保もまた同時に示されたものの、全国的な教員養成水準の確保、質保証の枠組みが改めて提示されたとみることができる。この答申を受けて、2016（平成28）年8月には、「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」が設置され、全国共通の教職課程コアカリキュラムを作成し、教職課程で身につけるべき最低限の学修内容を示すための検討が始まった〔文部科学省

ラム）とする、というものである。具体的な養成の方法は各大学の自主性、自律性に委ねるという留保もまた同時に示されたものの、全国的な教員養成水準の確保、質保証の枠組みが改めて提示されたとみることができる。この答申を受けて、2016（平成28）年8月には、「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」が設置され、全国共通の教職課程コアカリキュラムを作成し、教職課程で身につけるべき最低限の学修内容を示すための検討が始まった〔文部科学省

2016]。

こうした状況は社会の変化の影響を受けたものであり、改革は不可避である。情報通信技術の高度化や知識基盤社会への移行、社会の多文化化や価値の多元化など、学校が置かれた社会や地域コミュニティは多様化し、複雑化している。こうした社会変化に伴って教育観や教育内容の質的転換が急務になるとともに、特別支援教育への対応等、学校が対応することが期待される教育課題もまた複雑化しているといえることができるだろう。さらには、学校教育や教員養成を支える国家財政が逼迫し、学校教育や教員養成はこれまで以上に、投入された人材や資金に見合う成果を提示することが求められている。少子化を受けて、近い将来、全国の都道府県・政令指定都市における教員採用数が減少していくことも予想されており、教員養成の一層の質的な向上が求められている。

こうした教員養成の質的な向上は教職関連科目においても急務である。とりわけ、「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を扱う「教育原理」系科目は、その授業内容が抽象的なものになりがちであり、学習者が現実の教育課題との関連性を見出すことが難しいことが予想される。そのため、教員養成教育における意義を示し、時代の要請にこたえる可能性を明示する必要があるだろう。もっとも、「教育原理」系科目は、教育実践を解釈する多様な観方を提示したり、教育現実を構成する社会構造を提示することができる。そもそも古今東西の教育思想家が置かれた社会状況とそこでの教育実践、そこで紡がれた教育思想は、教職志望学生への教育観・教師観・子ども観を再構成する可能性をもつといえるだろう。本研究は、こうした「教育原理」系科目のポテンシャルを最大限に引き出し、より質の高い授業を教職志望学生に提供するための知見を提出することを目的としている。そのために本研究は、近年、専門職養成教育の分野で注目されているケースメソッド教授法に着目する。現実の学校教育実践に基づく事例教材を作成、実施するとともに授業の効果を調査・分析し、「教育原理」系科目で実施する際の意義と課題を提示する。具体的に、本研究は次のような構成をとる。まず、教員養成に関する近年の動向を整理する。そのうえで、「教育原理」系科目でケースメソッド教授法を扱う意義を、教員養成に対する学会からの提言とケースメソッド教授法の歴史から明らかにする（第一節、第二節）。そのうえで、実際に作成した事例教材を提示する。この事例教材によって実施した授業の効果を調査・分析するため、授

業前後に学生への質問紙調査を実施する（第三節）。こうした過程を経たうえで、事例教材を「教育原理」系科目で扱う意義と課題を提示する。

1. 「教育原理」系科目の位置づけと実施状況

昨今の教員養成制度改革は、教員養成教育の質的な向上を求めている。教員養成の質的な向上を図る一方策が、学校教育実践との結びつきを意識して、学生に教師として必要な知識を獲得させ、資質能力を養う教員養成教育である。初年次から附属学校や地域の小学校の教育実践を観察したり、ボランティアを行う試み、地域の小学生を大学に招いたイベントの開催、教育実習の長期化の試みなどが行われている。さらには、教職実践演習の導入に伴って、教員養成スタンダード（規準）を明示し、4年間の教員養成教育を改めて体系化し、水準の確保と質を保証する試みが各大学で進められている。

こうした状況の中、上記答申（「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」）で示された新たな教員養成関連科目の検討・設置が各大学で進められている。再編される教職関連科目において「教育の基礎理論に関する科目」として「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を扱う科目が、多くの大学で「教育原理」や「教育の思想と原理」として開講されている。当該科目においては、教育の思想や歴史が教授され、学習者が教育に関する多様な観方を獲得できるように授業の設計が行われている場合が多い。だが、こうした「教育原理」系科目は、戦後の教員養成の歴史において必ずしも旗色がよかった訳ではない。その理由としては、「教育原理」系科目で扱う内容がときに抽象的であること、教育思想に代表される教育学の古典作品の内容と、小学校や中学校、高等学校といった学校教育実践との関連性が直接的にはイメージしにくいこと、したがって教員として必要な資質能力の形成との結び付きが認識されにくかったことなどがあろう。だが、「教育原理」系科目では、教育実践を観察する際のパースペクティブを提示したり、教育現実を構成する社会的な構造を学生に気付かせたりすることができる。また、古今東西の教育思想家が置かれた社会状況や実践の軌跡、そこで紡がれた思想を提示することで教育や教師、子どもに対する観方を広げることもできるだろう。「教育原理」系科目が学校教育実践においても有効性をもつことは、小学校・中学校・高等学校のいずれの学校段階の教員からも報告例がある〔犬飼2014; 中橋2014; 力間2014〕。

「教育原理」系科目を担当する教員の多くが教育哲学や教育史を研究分野としていることを考慮するならば、教員養成に対する学会からの応答を無視することはできない。とりわけ、教育哲学会は個々の研究者のレベルでも学会のレベルでも昨今の教員養成改革に貢献する「教育原理」系科目の構想を行ってきた。それは直接的に教員養成科目を主題とすることもあれば、哲学が実践と切り結ぶことで生成する新たな哲学の可能性の探究という形で潜在的に論じられてもきた。

こうした動向の中で、直近の学会からの応答は、「哲学生成の現場としての教育実践」を主題としたシンポジウムであった。その内容は、看護師養成という現場〔前川2016〕、児童養護施設という現場〔大塚2016〕、ビジネス教育という現場〔竹内2016〕のそれぞれにおいて、教育実践において哲学が生成する契機を捉えるものであり、教員養成を構想するうえでも有効な視点が提示された。とりわけ、ビジネス教育という現場を主題とした報告においては、ケースメソッド教授法が取り上げられた。

2. 事例教材を扱うことの必要性

ケースメソッド教授法は伝統的に法曹養成やビジネスエリート養成の分野で行われてきた専門職養成教育における教授法である。近年は教員研修や教員養成の分野でも注目を集めるようになってきている。職務の現場で実際に生じうる事例を集め、諸課題を散りばめた事例教材を通じて行われる。学習の過程は、個人学習（事例を読み込み、設問に対する自分なりの回答を用意する学習）、5～6人の学生によるグループ・ディスカッション（ディスカッションリーダーが学生から選出され、クラス・ディスカッションのリハーサルを行う）、全受講学生によるクラス・ディスカッションの各段階から構成される。各段階を通じて受講学生は、現実の諸課題に対するシミュレーションを行うことができるとともに、他の受講学生の事例解釈や意見に耳を傾けることで、多様な考え方の存在に気づき、自分自身の観方を深め、広げることができる〔竹内2010〕。

ケースメソッドの授業は、学生が理論を適宜応用しながら事例を解釈する過程でもある。その点で、理論と実践を往還させる契機とすることができる。また、現実の職場では生じることが稀であるか、生じない方がよいがシミュレーションをすべき事例についても学習することができ、いわゆる職場学習とは異なる意義を有する教育方法であるともいえる。

教員養成の分野においても、スクールリーダー養成〔日本教育経営学会実践推進委員会2014〕、養護教員養成〔岡田・竹鼻2011〕、道德教育指導法関連科目の教授法〔中村・鎌塚・岡田・鵜澤・竹内2015〕等として実践されてきた。こうした動向の中、本研究においてもケースメソッド教授法を「教育原理」系科目の指導方法として用いる。

3. 学校教育実践事例と授業構想

（1）授業構想と成果に関する調査の概要

本研究においては、学校教育実践において生じる事例をもとにして、ケースメソッド教授法のための事例教材を作成した。事例教材の作成は主に、小学校での教職経験のある長谷や高等学校での教職経験のある浅田が行った。なお、事例教材の作成にあたっては、岡田・竹鼻、竹内らの研究成果を参考にした〔岡田・竹鼻2011; 竹内2010〕。作成した事例教材は、執筆者間で練り直しを行い、修正を加えた。その後、2016年12月にA大学において開講されている「教育の思想と原理」（1年次開講）を対象にしてケース教材を用いた授業を実施した。学生に対しては授業前後に質問紙によって調査を行い、教育観の変化を尋ねた。また授業方法に関する質問も行った。なお、対象学生の多くは、受講時点においては小学校の教員となることを志望している。

（2）事例教材

<①小学校編>

「女子グループのトラブル（いじめ?）」

6年2組の担任岡本由紀は、放課後佐々木亜美の母親からの電話があった。亜美は、ここ3日間連続で欠席をしており、今日は家庭訪問をして話を聞こうと考えていたところへの電話であった。内容は、娘がひどいいじめを受けていることがわかったので、相談したいというものであった。由紀は朝の欠席連絡が入った時点で、学年主任に放課後の家庭訪問を申し出ていたもので、いじめの話を報告しないまま一人で家庭訪問をした。

佐々木家では、父親も早く帰宅して一人娘の亜美と親子3人で担任の由紀を待っていた。亜美が学校へいけなくなったのは、これまで仲良し5人組だった絵美里たち全員からいじめを受けているからということだった。話しかけても無視される、自分の方をみて笑われる、何より自分の悪口を散々言い合っているライ

ンを別のクラスメイトから教えてもらってショックを受けているという話を聞き、ラインも見せられた。由紀自身もショックを受けた。自分のクラスではいじめはないと安心していただけのがもろくも崩れたのだ。由紀は、自分は亜美の味方であり必ず守ること、いじめ側である4人から話を聞き、しっかり指導することなどを話した。母親は、かえっていじめがひどくなることを心配したが、丁寧に見守ることを約束して帰った。

翌朝、由紀は早速学年主任に報告した上で、学年団の先生に協力してもらい、いじめ側とされた4人とその周囲の児童たちから聞き取り調査を行った。その結果、これまでの亜美の横暴な女王様ぶりが見えてきた。担任の由紀には仲良し5人組と見えていたが、実際は亜美が後の4人を振り回していて、随分ひどい言葉も使っていたことがわかってきた。クラスの男子たちでさえ亜美をかばうことはなかった。話を聞けば聞くほど、亜美の横暴さに我慢しきれなくなった4人が反撃したのであり、亜美が一方的にいじめられていたというのではないと思えてきた。学年会でも、一方的ないじめというよりはけんかに近く、それぞれが反省し悪いところを認めて謝り合うことが必要だという結論がまとまった。

由紀が亜美の母親に電話で学年会での結論を伝えると、「先生は、うちの子を悪者にするんですか。あんなに守ると、味方だといってくれたのに！うちの子はいじめられたんですよ！」と激昂され、電話を切られた。

【学習テーマ】

- ・保護者からいじめの訴えがあったとき、どのような点に留意して対応すればよいか。
- ・女子グループの仲間はずれ（いじめ）が発覚した時、子どもにどのような対応をしたらよいか。
- ・学年、学校の対応はどうしたらよいか。

【設 問】

- 1 担任の初期対応についての問題点を考えてください。
- 2 担任をはじめ学年は今後どのように対応すればよいか、考えてください。
- 3 「いじめ」のない学級づくりのためにどんな取り組みがあるか、考えてください。

【ティーチングポイント例】

設問1 問題発覚後の担任の対応

①保護者への対応

- ・問題の全容がつかめていないままに、いじめとして対応してしまった。
- ・解決に向けての学校内での取り組みや方針を保護者にきちんと伝えられていない。

②学級への対応

- ・問題が発覚するまで、絵美をめぐるグループ内の問題について気がついていない。
- ・学級の児童との信頼関係を築けていない。

③関連する教職員への対応

- ・保護者からのいじめの訴えを聞いた後、学年主任にそのことを報告せずに一人で家庭訪問をしてしまった。
- ・管理職への報告、相談がなかった。

<②中学校編>

「いじめに端を発した不登校」

中学校3年生の浩子は、一人での多い、目立たない大人しい生徒である。

2年生の12月に同じクラスの男子グループからいじめを受け、そのことから不登校気味になった経験をしていた。いじめ側の男子グループは、当時流行っていたコマーシャルのセリフを大人しい浩子にあだ名として面白おかしく投げつけからかっていた。男子たちの意識は、「軽いからかい」程度であったが、浩子にとっては、学校に来るのもつらいところまで追い込まれていった。欠席が増え、担任による何度目かの家庭訪問の中で、からかいの事実が明らかになり、学年全体での指導が行われた。男子たちは、保護者も呼び出され、校長訓話を受けるという厳しい指導がなされ、しっかり反省したようであった。浩子にもそのことが伝えられ、浩子に直接男子グループが謝罪するという場も持たれた。浩子ももともと真面目な生徒であり、学校へは登校したいという気持ちがあったが、男子たちのいる教室に入ることができず、2年生の3学期は保健室登校で終えることとなった。

学年団の先生で相談し、3年生のクラス編成でいじめた男子たちと浩子が同じクラスにならないよう配慮した。担任も2年生の時の男性の先生から、今の林絵里先生に変えることにした。

学年の教育相談担当でもある絵里は、浩子が新学期のスタートをきっかけに教室に入り新しいクラスに早くなじめるよう、様々に工夫し配慮した。そのおかげで、新学期は始業式から教室に入ることができ、心配した欠席もなく順調な滑り出しであった。

ところが、夏休み明けの2学期になると、少しずつ欠席が目立つようになってきた。連続で休むのは、2日間くらいで不登校というわけではないが、次の進路である高校進学を考えても、欠席が増えるのは良くないと考えた絵里は、放課後に呼んで話を聞いてみることにした。「最近何かあったの」と聞いてもうつむいたままの浩子に、絵里は少し苛立ちを感じた。高校入試のことが気になっていた絵里は、「なぜ、また度々学校を休むようになってしまったのか」「2年生の時のいじめがまだ関係しているのか」「高校進学についてどう考えているのか」「高校への内申書に2年生の時に続いて、3年生でも欠席が多いということが書かれていると、入学試験にも悪い影響がある」などと畳みかけるように話したが、浩子はうなずくくらいで言葉を発することはなかった。そして、この日を境に、浩子は全く登校しなくなってしまった。

【学習テーマ】

- ・いじめ問題を一応解決した後、担任はどのように見守り対応していくとよいか。
- ・不登校から復帰後の生徒に対して、担任はどのように対応していくとよいか。
- ・学年、学校の対応はどうしたらよいか。

【設問】

- 1 いじめ問題を解決した後の担任の対応について、具体的な方策を考えてください。
- 2 不登校から復帰後の生徒に対しての担任、学年の対応を考えてください。
- 3 学年、学校全体として組織的に対応していくには、どのような対応をすればよいのでしょうか。

【ティーチングポイント例】

設問1 いじめ問題解決後のフォロー

①本人への対応

- ・浩子が教室へ入れないという状態を改善するための対応がなされていない。
- ・いじめた男子たちへの恐怖心を和らげ、学校内での安心、安全な気持ちを浩子に持たせるための対応を工夫していない。

②学級への対応

- ・いじめた男子たちを含めた学級全員に浩子を学級に再び迎え入れるための働きかけをするよう指導できていない。
- ・自分の学級内でのいじめを今後根絶するための学級への働きかけができていない。

③学年、学校全体への対応

- ・学年、学校全体でのいじめ被害生徒への配慮の必要性を訴えられていない。

<③高校編>

「ADHDの診断を受けた新入生への対応」

入学式も無事終わりで、クラスごとの話も終わった後、水野陽太の母親が、担任の前川翔太に面談を申し込んできた。前川は、昨年新任教員としてこの高校に着任し今年初めての担任を任されていた。何かと身構えながら、教室で母親と二人で向き合った。

母親からは、小学校の5年生の時にADHDの診断を受けていること、中学校では、担任の先生を中心にいろいろと配慮をしてもらっていたこと、本人の障害のことから手に技術をつけてもらいたいと考えこの高校を希望したこと、合格できて親子共々とても喜んでいること、などの話を聞いた。高校へは初めての電車通学となるため、春休みに何度か同じ時間帯で練習をした話を聞き、前川は、これは大変な生徒を持つことになったぞと思った。帰り際に母親から、「いろいろとご面倒をかけると思うがよろしくお願いします」と言われ、自分で大丈夫か、自分が持たないといけない生徒なのかと疑問を感じつつ、「こちらこそよろしくお願いします」と頭を下げた。

学年主任に報告をしたが、主任からは「入試を合格したのだから、そんなに大変なことはないだろう。ここは特別支援学校ではないのだから、本当に大変な生徒ならそういう学校に行ってもらえばいいんだ。心配なら、保健室の先生に相談してみろ」と言われた。前川は、なるほどと思ったことと、初めての新1年生の担任業務の多さに忙殺され、保健室に相談に行くこともなく1週間が過ぎた。その間、陽太の様子に特別目立ったこともなかった。

2週間目の月曜日の朝、突然事件は起こった。いつものように前川が朝のSHRの準備をしていると、校門の方で何か騒ぎが起きたらしく自分の名前が呼ばれて、慌てて職員室を飛び出した。校門のところで目に

したのは、両側から羽交い締めにされてもの凄く興奮している陽太と、それを取り囲んでいる教師集団だった。とにかく保健室に連れて行って落ち着かせて、話を聞くよう生徒指導部長から指示され、その場にいた教師と一緒に抱えるようにして陽太を保健室に連れて行った。事の発端は、陽太がいきなり校門で挨拶をしていた校長に「死ね!」と叫び、周りの教師が強い口調で注意をしたところその教師につかみ掛かったということであった。陽太は、興奮がおさまると、今度はこんこんと寝てしまい、ほとんど話は聞くことができなかった。学年主任に言われた前川は、母親に迎えに来るよう連絡し、昼まで保健室で寝ていた陽太を連れて帰ってもらった。

【学習テーマ】

- ・発達障害の診断を受けている生徒の入学に際して担任はどうしたらよいか。
- ・学年、学校の対応はどうしたらよいか。

【設問】

- 1 発達障害の診断を受けていることを保護者から打ち明けられた後の担任の対応について、考えてください。
- 2 発達障害のある生徒が問題を起こした場合の担任、学年の対応を考えてください。
- 3 学年、学校全体として組織的に対応していくには、どのようにすればよいのでしょうか。

【ティーチングポイント例】

設問1 保護者からの発達障害の相談後の対応

①保護者への対応

- ・保護者から発達障害の診断を受けているという話が出たときに、学年主任や養護教諭、特別支援教育コーディネーターなどの先生の応援を頼まず、自分一人で話を聞いている。
- ・保護者からどのような対応を求められているのか、注意しないといけない点は何かといった情報を聞いていない。
- ・何かトラブルが起こった際の対応を保護者と相談できていない。

②学年や学校への対応

- ・養護教諭や、特別支援教育コーディネーターなどの専門的知識を持っている先生に相談できていない。

- ・学年会で相談し、学年全体としての体制づくりができていない。
- ・管理職に相談し、学校全体としての体制づくりができていない。

(3) 授業の実施と成果

実際に教職関連の授業（「教育の思想と原理」）において事例教材を用いた授業を実施した。用いた教材は①小学校編「女子グループのトラブル（いじめ?）」である。調査では、授業の実施が学生の教育観に与える影響を明らかにすることを目指した。調査は質問紙調査によって実施した。またこれに関連して「教育原理」系科目に対する学生の考え方をも調査している。

①調査項目

調査・分析を行ったのは下記の3項目である。

- A. 「教育原理」系科目の理想のイメージ
- B. 教育観
- C. ケース教材を用いた授業による教育観の変化

いずれも自由記述により調査を行った。

②対象学生

調査対象学生は、2016年度に「教育の思想と原理」（1年次開講）を受講した大学生112名である。全15の授業のうち、第13回に実施した。質問紙の有効回答数は98であった（有効回答率は87.5%）。

③調査結果

調査によって得られたデータは、テキストマイニングの手法によって分析を行った。これは、文章のようなテキストデータから言葉を抽出し、探索的な分析を計量的に行うものである。ただし、分析によって得られた結果だけでは、解釈が難しい場合もある。そのため、もとの記述に戻って分析を試みる。なお分析には、KH Coder (ver. 2.00f) を使用した。

分析はまず、各項目の頻出語上位15点をリストアップした（表1）。次に、これをもとにして典型的なもとの記述をリストアップした。

A. 理想とする「教育原理」系科目の授業

理想とする「教育原理」系科目の授業については、次のような回答が見受けられた。

表 1. 頻出語のリスト

理想とする 「教育の原理」の授業		教育観（授業前）		教育観（授業後）	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
教育	38	生徒	22	対応	8
授業	12	子ども	15	意見	4
学ぶ	10	人	13	一人ひとり	4
人	10	育てる	12	大切	4
考える	7	人間	12	考える	3
基礎	5	一人ひとり	10	分かる	3
考え方	5	教える	10	聞く	3
今	5	楽しい	7	問題	3
昔	5	児童	7	解決	2
知る	5	社会	7	学年	2
知識	5	先生	7	教員	2
歴史	5	大切	7	見る	2
科目	4	個性	6	広い	2
改善	4	自分	6	考え方	2
講義	4	スポーツ	4	子ども	2

教育の変化や歴史を学び、これからはどのような教育が求められていくかを考え、学生同士が話し合い、まとめ、発表する授業。今まで受けてきた教育の問題点や改善点をみつける授業。思想や歴史を実際の教育現場の問題にあてはめて考える授業。

今と昔を比べることでもっと良い授業を作ることができと思う。いろいろな知識を学べることはとても良いと思う。自分の先生としての幅が広がる。

教育に関する歴史的な事項と現在の教育とを比較して、教育に関する知識を獲得するとともに、教育に関する観方を広げることが理想とすることがうかがえる。また、講義式の授業ではなく、発表やディスカッションを含む授業スタイルを学生が求めていることもうかがえた。

B. 自分自身の教育観（授業前）

学生自身の教育観については、次のような回答が見受けられた。

生徒の自主性、社会性を育て、社会に出てたくましく生きることの出来る人間を育てる教育がしたい。

人間的成長をさせられる先生になりたい。

教育とは、一本道ではないと思う。自分の概念だけでは成り立たないと思う。色々な視点から広い視野で見ること。

児童・生徒を送り出す先の社会との関係性や、児童・生徒の成長を願う回答が見受けられた。また、様々な教育観を獲得することの必要性を感じている回答があった。

C. 自分自身の教育観（授業後）

事例教材を用いた授業実施後の教育観については、次のような回答が見られた。

私自身だけの意見に捉われるだけではなく、他の人たちの意見を聞くことができる。

問題にどう対応するか。問題解決に関するものの見方。

生徒指導に関する場面指導を詳しく検討するケースによる授業のためか、問題の解決や、対応といった視点が多く見受けられた。

質問紙の調査から、授業の前後で、学生の教育観に関する回答はやや異なるものとなっていた。授業前は、児童・生徒を育てるという観点が多く見られたが、授業実施後は、学校教育実践が抱える課題に対する意識がうかがえた。しかし、その反面で「教育原

理」系科目が目指す学生自身の教育観に対する深まりや変化は確認することができなかった。また、授業実施前に見られた理念的・抽象的な教育観と具体的な教育観とを接続するような回答はほとんどみられなかった。

④調査結果に関する考察

学校教育実践において、将来、ケース教材の作成段階において前提としていなかった問題状況が発生したり、指導上の知見の進展や社会の変化があるとき、教員はこうした知見を獲得し、社会の変化を受け入れながら指導にあたる必要がある。それはときに教育観や子ども観の変化が伴うことが予想されるため、たとえば、指導場面を扱うケースによって授業を行うとしても、学生が前提としている教育観や子ども観を問い直させるような授業が必要となるだろう。あるいは、教育に関する歴史や思想を扱う授業の中で、学校教育実践との関連性や具体例を提示することで、受講学生自身の中で関連づけることができるようになるのではないかと考える。また、今回の調査では中学校や高等学校の事例教材を用いた授業については実施をしていないため、今後、これらの事例教材を用いた授業を実施し、学生の学修成果を確認する必要性もあるだろう。

今後、生徒指導等に関連する事例教材を用いた授業を「教育原理」系科目に組み込むためには、学生が教育観や教育の思想、歴史的な事項と実際の指導場面を関連づけることができるような授業構成が必要になるだろう。それは例えば、15回のコースデザインであり、一回一回の授業のデザインに関わってくる。例えば、具体的な対応を考えさせる問いから、教育の目的や教育観を問う問いを発して、学生の答えを引きだし、これを授業担当教員が関連づける工夫が考えられるだろう。

おわりに

本研究においては、近年の教員養成改革の動向、とりわけ教職関連科目の構成や実施内容に着目し概略を辿った。そのうえで、学校教育実践における事例を教材化し、ケースメソッド教授法によって授業を行った。授業実施前の想定としては、受講生は、学校教育実践の具体的な状況や対応方法に関する理解を深めるとともに、自分自身の教育観や教師観、子ども観を深め、刷新することが可能となるというものだった。しかし、指導方法に関する学習にはつながったものの、

教育観や子ども観を深めたり、変化させたりするためには、指導上の一層の工夫が必要であることもみえてきた。

学校教育実践で求められる対応を教職関連科目で学修するために、事例教材を扱うことには一定の意義があると認められたが、これが、教員として実際に学校に身を置き、子どもへの指導・支援や保護者への対応の中でどう生きてくるのか、より長期の期間を設定して効果の検証に取り組む必要性もあるだろう。

また、事例教材は、学校教育で実際に生じうる事柄をもとにして開発を行っている。現実の状況においては見過ごされてしまいがちなことも事例化することで、認識可能となり、教職志望学生の学習に資すると考えられる。だが、事例化することは他方で、複雑な教育実践の場で現実に生じうる多様な出来事を捨象することでもある。授業者はこの点を考慮に入れながら、授業の受講生の見解に耳を傾け、掘り取って授業を実施する必要があるだろう。

「教育原理」系科目は教員養成の中に位置づけられている以上、教員養成に対する社会からの要望や、学校教育実践との対話のための回路を常に開いておく必要があるだろう。古今東西の教育思想家の教育実践や教育観と、学校教育実践の現実を切り結び、提示することで学生自らが理論と実践を往還する契機となるのではないか。このことは、教職を志望する学生が教職生活の生涯に渡って、社会の変化を受け止めながらも自らの教育観を不断更新し、専門性を高めていく基礎になると考える。

引用・参考文献

- 犬飼俊明, 2014, 「高校教員にとっての教育哲学－哲学が支える生徒指導の一例－」林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著, 2014所収, 35-42頁。
- 大塚類, 2009, 『施設で暮らす子どもたちの成長－他者と共に生きることへの現象学的まなざし－』東京大学出版会。
- 大塚類, 2016, 「『現象学する』とはどういうことか－みずからの体験を事例として省察する意味－」教育哲学会第59回大会（東京大学）配布資料。
- 岡田加奈子・竹鼻ゆかり, 2011, 『教師のためのケースメソッド教育』少年写真新聞社。
- 木村拓也, 2014, 「国立大学教育学部における教育学各分野の量的変遷」林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著, 2014所収, 100-123頁。
- 下司晶・木村拓也・奥泉敦司, 2014, 「学生は教育哲

- 学は何を求めるのか－質問紙調査にみる「必要性」と「有用性」の感触－」林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著，2014所収，124-150頁。
- 下司晶・奥泉敦司，2014，「教育哲学は学生の教育観をいかに成長させるのか－教育思想がもたらす広がり・深まり・変化－」林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著，2014所収，151-182頁。
- 下司晶・山名淳・古屋恵太・林泰成，2014，「イメージ先行の教員養成改革の前に」林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著，2014所収，3-13頁。
- 高知県土佐市編，2015，『討論授業が中学校の授業を変える－ケースメソッドによる土佐市の学校改革』学事出版。
- 高木晴夫・竹内伸一，2006，『実践！日本型ケースメソッド教育』ダイヤモンド社。
- 竹内伸一，2010，『ケースメソッド教授法入門－理論・技法・演習・ココロ－』慶應義塾大学出版会。
- 竹内伸一，2016，「学習者の信頼獲得に向けての省察－改めて経営大学院教育の不確かさを問うてみて－」教育哲学会第59回大会（東京大学）配布資料。
- 中央教育審議会，2015，「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について－学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて－」（答申），http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf，2017年1月16日参照。
- 中村美智太郎・鎌塚優子・岡田加奈子・鶴澤京子・竹内伸一，2015，「ケースメソッド教育のアプローチを活用した道德教育の可能性－教材の開発とそれを用いた授業の検討－」『静岡大学教育研究』，第11号，59-74頁。
- 中橋和昭，2014，「小学校教員にとっての教育哲学－教育実践者が教育哲学を学ぶ意義とは何か－」林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著，2014所収，20-26頁。
- 日本教育経営学会実践推進委員会編，2014，『次世代スクールリーダーのためのケースメソッド入門』花書院。
- 日本教師教育学会編，2008，『日本の教師教育改革』学事出版。
- 林泰成，2014，「教員は教育哲学に何を求めるのか－人生観・世界観としての哲学－」林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著，2014所収，59-71頁。
- 林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著，2014，『教員養成を哲学する－教育哲学に何ができるか－』東信堂。
- 前川幸子，2016，「看護学実習における『教え－学ぶ』の成り立ち」教育哲学会第59回大会（東京大学）配布資料。
- 文部科学省，2016，「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 設置要項」，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1376303.htm，2017年1月16日参照。
- 山崎準二，2008，「教員養成カリキュラム改革の課題」日本教師教育学会編，2008，117-134頁。
- 力間博隆，2014，「中学校教員にとっての教育哲学－『ポジティブリスト主義』への対応として－」林泰成・山名淳・下司晶・古屋恵太編著，2014所収，27-34頁。